

文末に生起する副詞的 to 不定詞の解釈について

吉田 幸治

1. はじめに

本稿では、文末に生起する副詞的な to 不定詞(以下「文末不定詞」と略)に関してその解釈様式について考察を行うが、まず副詞類とは何かということについて考えておきたい。Quirk et al. (1985: 476)は英語の副詞類の解釈における上位概念として次の(1a-g)を提示し、それらは主要な7つに分類されるとしている。

(1) a. SPACE/b. TIME/c. PROCESS/d. RESPECT/e. CONTINGENCY/f. MODALITY/g. DEGREE

このうち(1e)の CONTINGENCY (付随現象) の具体的解釈として cause/reason/purpose/result/condition/concession の6種があると記されている。この6種のすべてが文末不定詞に関与するわけではなく、(2)に記すように目的、結果、原因、理由、条件の5種が関与し、原則として譲歩の解釈は得られない。

(2) a. I hurried to the station **to catch the last train.** (purpose)

b. His son grew up **to be a great musician.** (result)

c. His parents were very glad **to hear the news.** (cause)

d. He must be a rascal **to do such a thing.** (reason)

e. **To turn to the left,** you'll find the bank. (condition)

以下本研究では動詞の意味と文脈を中心に考察を行い、(i)文末の副詞的 to 不定詞句は本質的には単義であり、(ii)多用な解釈は動詞の中心義 (core meaning) と to 不定詞句の意味によって合成的に導出されることに対してその説明の方向性を示す。

2. to 不定詞句の成り立ち

印欧祖語において、動詞の原形は名詞としても機能する場合があったことが知られており、このことは必ずサンスクリット語・古典ギリシャ語の文法書には明記されている。現代英語においてもその名残があると考えるべきであり、次のような「軽動詞+a+動詞の原形」は今日でも頻繁に用いられている。

(3) a. Take a **look** around.

b. Let's have a **swim**.

このような性質を考慮するならば、英語の to 不定詞は深層の概念においては「to+名詞」とみなすことが可能であり、結果的に TO+INFINITIVE=PREPOSITION+NOUN という捉え方が可能である。

ここで日本の「XはYがZです」に相当する英語の原初的(primitive)な統語枠を(4)であると考えられる。

(4) NP+V+XP+YP (ただし、典型的には V は be 動詞、XP は形容詞相当句、YP は前置詞句)

実は英語の文の大部分が(4)に収まるもので、John is particular about food.のような be+形容詞からなる文、A helicopter was seen to land in the field.のような受動文、さらには結果構文と one's way 構文などもすべて(4)の基本統語枠を利用しているといえる。ここでの考察は次のようにまとめることができる。

(5) to 不定詞句は抽象的なレベル(母語話者が意識しない深い層)において[前置詞+名詞句]と同等のスキーマを有している。

(6) 実際の発話として用いられる to 不定詞句は[前置詞+名詞句]と同等の分布を示す。

3. 副詞的文末 to 不定詞の歴史

Los (2005: 27)によると、歴史的にみると文末不定詞は「目的を表すものであり、意図された結果を示す」ものがほとんどであり、共起する動詞にもパターンがあるとされる。具体的には(7)である。

(7) arisan 'arise'; becuman 'come'; cierran 'turn', 'go'; cuman 'come'; efsan 'hasten'; faran 'go'; faran 'go'; forlatan 'leave'; gangan, gan, gengan 'go'; gewitan 'depart'; licgan 'lie'; sittan 'sit'; standan 'stand'; wendan 'turn', 'go' (Los (2005: 34))

つまり移動を表す動詞が中心であり、わずかに lie などの休息を表す動詞と共起していたようである。おそらく、to が持つ方向性が「移動の着点としての結果」の意味を強く保持していたからと考えられる。

4. 解釈様式

Biber et al. (1999: 828)は文末不定詞の解釈が「原則として目的を示すものであり、例外的に結果を表

すことがある」としている。Egan (2008: 102)でも触れられているように、この解釈上の差異は動作主の意図があるかないかという「意図性」の有無に還元できるものであり、あらかじめ意図された結果であれば目的解釈となり、意図されていない場合には結果解釈になるのである。意図性に関しては微妙な面もあるが、主として文の S+V の部分が中心となって導出されるものと考えておけばよい。

では具体的な解釈様式について考えてみよう。まず、構文の成立背景を次のように考える。

(8) 文末の副詞的不定詞句は主節動詞によって示される事象 α に後続する事象 β を加えることで成立している。

ここでの事象とは通常命題で表示されるものだけではなく、非定形節においても表示できるものを含む。つまり、不定詞句も事象を表すと考える。この(8)の概念形式を表示するのにもっとも適切なものが(4)の基本統語枠である。そして、このようにして得られる構文を支えるイメージスキーマがあり、(9)のようなものであると考えられる。

(9) 文末不定詞を伴う文のイメージスキーマは「事象 α が事象 β を引き起こす」である。

これは意図性の有無とは無関係に連続して二つの事象が生じていることを示す。さらにこのイメージスキーマに対して、語用論的に次のような「具体的意味づけ」が行われる。

①人間の行動には何らかの目標・目的が存在しており、それが目的の解釈を得ることにつながる。

②常識と知識をもとに、事象 α と事象 β の結合関係には強いものと弱いものが想定される。

②の結合関係の強弱は「因果関係」の強弱と言い換えることが可能なものであり、常識・百科事典的知識にもとづいて判断される。さらに、文末不定詞は時制を持たない非定形節であるために、図像的(iconic)に時制を持つ主節の後続事象とみなされるのがデフォルトである。言語類型論で言われてきたように、厳密な時制を持つ印欧語では出来事の生起順に要素を配列することが求められる。つまり、文末に to 不定詞を配置することそのこと自体が「主節の出来事の後に生じた出来事」を表しているのである。

もちろん、目的解釈の場合には文頭に to 不定詞句を置くことも可能であるが、これはいわゆる「情報構造」に関わる問題である。本来の生起位置の文末では、不定詞句は焦点副詞的であり、新情報を表している。to 不定詞句を文頭に配置することによってその部分が主題的な要素つまり旧情報であることを示し、主節によって「何をするか」「何が起きたか」等を新情報として提示するための方略なのである。

5. おわりに

統語構造を中心とする言語理論において、語順の問題は解釈とは無関係のものともみなされる傾向があり、表層に現れる語順は等閑視されることが多い。しかし言語表現における多用な解釈は人間の知識・理解・経験にもとづく認知的な解釈によるものであり、その大部分は語用論的なものであるといえる。

多用な解釈を階層構造や機能範疇を設定することによって説明しようとする試みがなされることもあるが、to 不定詞句の解釈のメカニズムを階層構造などに依拠して説明することによって本質に迫ることは困難であろう。構成素間の結合の差異を示すことができたとしても、合成的な解釈を説明する手段とはなり得ないからである。

本稿では文末不定詞句を対象に、解釈が行われる認識様式を考察したが、今後は認識様式を言語形式に写像する際に何が行われているのかを考察することが重要になると思われる。言語学者の多くは言語現象の発掘や理論の精緻化にばかり注力し、この部分に関してはあまり研究が進んでいないからである。打開策としてこれまで以上に学際的な研究が必要になると思われる。言語研究は「言語の記述に始まり言語の記述に終わる」とよく言われるが、言語記述を厳密に行うための新しい理論等の登場が待たれる。

主要参考文献 Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., and Finegan, E. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman. / Boas, E. V. M., Rijksbaron, A., Huitink, L., and de Bakker, M. (2019) *The Cambridge Grammar of Classical Greek*. Cambridge University Press. / Bresnan, J. W. (1972) *Theory of Complementation in English Syntax*. Ph. D. dissertation. MIT. / Egan, T. (2008) *Non-finite Complementation*. Rodopi. / Halliday, M. A. K. (2013) *Halliday's Introduction to Functional Grammar*. Routledge. / Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press. / Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press. / Los, B. (2005) *The Rise of the To-Infinitive*. Oxford University Press. / Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman. / Sawada, H. (1985) "The Infinitival Marker To and AUX System in English." *English Linguistics* 2. pp. 184-201.